

## 大正九年、出版ビジネスは 文学 を自律させた

「読売新聞」コラム「読書界と出版界」から

山本芳明

1

大正九年、日本の経済界は第一次世界大戦後におこった不況の渦に巻き込まれようとしていた。八幡製鉄所の大同盟罷業に代表される労働争議の頻発、市電のストライキ、株式の大暴落、経済大恐慌など、景気は明らかに悪化していた。しかし、そのさなか、出版界は周囲の経済状況を無視するかのように、成長していた。成長の中核にあったのは、文学 出版だった。これにより、文学者の生活様式、文学 そのものの位置づけさえも変化しようとしていた。本稿では、「読売新聞」に掲載されたコラム「読書界と出版界」を手掛かりとしながら、変化の実態に迫っていきたいと思う。

はじめに、「読書界と出版界」について説明しておく。 「読書界と出版界」は、大正八年一〇月二六日から「読売新聞」日曜付録に掲載が始まったコラムである。<sup>(注)</sup> このコラムは、まさにそのタイトル通り、第一次世界

大戦後の書籍や雑誌の出版状況や読書傾向などを毎週レポートするものであった。レポートの主眼は、読書案内にはなく、第一次世界大戦後の不況の中で、成長する出版産業の現在を報告することにあつたと考えられる。不況下の日本で、好景気を維持していた出版業界が注目され始めたといふことだろう。我々は、一定の限定つきではあるが、このコラムを通じて、大正中期以降の出版界の動向を追いかけていくことができる。そのこととは、文学 活動の基盤を社会的、経済的な側面と十分関係づけることなく、分析しがちであった日本近代文学研究にとって新たな視点を提供してくれることになるだろう。

これまでも、松岡譲の『漱石の印税帳』（昭30・8）、松浦総三編の『原稿料の研究』（昭53・11）、阿達義雄の『幕末明治文学と庶民経済』（昭58・3）、大里恭三郎・竹腰幸夫編著の『文学に見る近代作家十人』（昭61・3）などといった研究や、最近では飯田祐子に『道草』と自然主義における『金』の問題 小説家という職業 「1」名古屋大学国語国文学』74号 平6・7」という論文（注4）があり、全く無視されてきた視点というわけではない。しかし、従来の研究ではこのコラムの連載が開始された大正八年以降にはつきりと顕在化した、出版界の劇的動向 少なくとも 文学 にとって劇的な変化を十分には把握していないと思われる。

変化の一つは、創作欄をもった総合雑誌タイプの雑誌が増えて、「創作需要過剰」の安定した市場が形成されたことである。そのため、原稿料があがるという、作家にとっては願ったりかなったりの状況が生まれたのであった。この点については、拙稿（注4）で言及したことがあるので指摘だけにとどめるが、本稿で証明したいのは、この時期、文学 出版が儲かる商売になったという事態である。恐らく、後の円本ブームが生ずるための地ならしにもなったと思われる。なぜなら、後にふれるように、この時期には、全集の発行もまた盛んであった

からだ。大戦後の深刻な不況の下で、好景氣を迎えた出版業界は、今や、「出版は不況に強い」という神話を築こうとしていたのだ。<sup>(注)</sup>

「読書界と出版界」に掲載された半期毎の新刊書の売り上げリストを参考にあげてみよう。例えば、「高いが売れる」「読売新聞」大9・3・14 以下、「読売新聞」に掲載された記事については、掲載年月日のみを記す。）では、大正八年下半年の東京堂調べの新刊書ベスト二〇が掲載されている。いうまでもないが、東京堂は元取次の最大手であると同時に、小売店としても大きな存在であった。（順位を明記し、原本にあたるなどして確かめられたものについては著者名、発行所、発行年月日、定価等を注記して記事の内容を補った。以下も同じ。）

- 1 平和条約並議定書（朝陽会 大8・12・22 30銭）2 哲学総論（柴田安正、綾川武治、香原一勢共著 東京刊行社 大8・7・7初版 大9・1・15九版 75銭）3 講和会議を目標して（中野正剛 東方時論社 2円）
- 4 袖珍和英辞典（神田乃武・石川林四郎共編 三省堂 大8・10）5 <sup>実地指導</sup>趣味の写真術（三宅克巳 アルス 1円80銭）6 資本経済講話（福田徳三）7 三部曲（有島武郎 叢文閣 大8・12・12 大9・11二四版 1円50銭）8 美学講話（石田三治 東京刊行社 75銭）9 社会主義批判（室伏高信 批評会 2円40銭）10 縮刷水彩画の描き方（三宅克巳）11 労働者問題（プレントナー）森戸辰男訳 岩波書店 大8・10・3初版 同年10・5再版 1円80銭）12 現代生活と婦人（山川菊栄 叢文閣 大8・10・21 1円60銭）13 <sup>案新</sup>英語急速暗記法（本多孝一 松邑三松堂 1円）14 大國の危機（大谷光瑞）15 唯物史観の立場から（堺利彦）16 <sup>訳全</sup>資本論（杉浦要訳注 経済社 第一冊 大8・9・5初版 9・10再版 1円80銭 第二冊 大8・12・25 2円50銭）
- 17 小資本で儲る商売（商店雑誌社編 佐藤出版部 2円）18 皮肉文集（村上浪六 日本書院 1円40銭）

19 恋より祈へ(大野達郎 止善堂書店 95銭) 20 全訳社会改造の原理(パートランド・ラッセル 松本悟郎 日本評論社出版部 大8・12・12 1円50銭)

一見、「社会問題に関する書籍」(「高いが売れる」)が売れているような印象を受けるが、東京堂仕入部の赤阪の談話によれば、「概括的に観ると、何と云つても文学物が第一の売高を占め」ているという。新潮社の佐藤義亮の談話(「財界の変動と出版界」大9・5・30)には、「私共などでは御承知の通り特殊な文学物ばかり扱つて居りますから、四月などは寧ろ註文が三月よりも増してゐるやうな有様です」、「世間が如何に不景気になつても、よい本は矢張りよく売れますので、世間の景気不景気よりも尚恐るべきは読書社会の鑑識眼であります」などである。また、大正九年六月二七日の「新潮社週報」には、「不景気の大濤はあらゆる方面の根柢を揺りつゝあり。出版界は如何なる影響を蒙れるかは深く知らざれど、我が社は依然として殺到し来る註文の整理に忙はしきの状態に在り。」と宣伝している。新潮社に限つたことでいえば、連載コラムの一つ「出版界の人物」(三)に載つた記事(「新潮社の佐藤義亮君」大9・9・5)によれば、大正八年の出版物の上田屋取次販売高が「実に三十有八万円に上つたといふ痛快な事実」や、東京印刷業組合の印刷料値上げに対抗して設立した「資本金七十万円の『富士印刷』の社長」であることなどが紹介されている。

これらのことが劇的であるのは、「文学書の売行きが落込み、初版一千部以上を刊行するものは稀で、一般的には七百部が限度。」(『新潮社八十年圖書総目録 明治四四年の項)とされ、「千五百部売つても、正味総収入が六、七百元。」、「再版などに希望をもつことが出来なかつ」(小川菊松「春陽堂に迫つた一群」『出版興亡五十年』)

た明治末年の状況に比較すれば、まさに天と地ほどもちがうからである。続く大正九年の出版状況をあげて確認していこう。大正九年の上半期の調査は、「上半期の好著 東京堂調査」(大9・7・4)にベスト三〇の形で掲載されている。(ただし、22位が脱落している。)1、2位が「売高に於て他の總ての書籍の群を遙かに抜いてゐる」と注記されていた。

- 1 経済思想史論(河上肇 岩波書店 大9・4・10初版 大12・7・10 四六版で絶版 1円50銭) 2 惜みなく愛は奪ふ(有島武郎 叢文閣 大9・6・5 大9・11 三五版 1円30銭) 3 労働者の  
闘たるのマルクスとクロポトキン(ジョン・スバルゴ 遠藤無水訳 文泉堂 大9・2・20 1円80銭) 4 近代劇選集(1)(楠山正雄訳 新潮社 大9・3・11 2円30銭) 5 芭蕉全集(聚英閣出版) 6 仏和小辞典(理学士浦口善為 博文館 1円) 7 普通選挙(佐々木惣一博士 岩波書店 大9・4・22 25銭) 8 地上 第二部(島田清次郎 新潮社 大9・1・18 昭2・8 二五〇版 1円60銭) 9 自分の人生観(武者小路実篤 新しき村出版部 大9・5・20 30銭) 10 新生 第二巻(島崎藤村 春陽堂 大8・12・28 1円80銭) 11 大正九年国民年鑑(渡辺為蔵 民友社出版部 大9・3・7 1円50銭) 12 囚はれたる経済学 前編・後編(大西猪之介 東京賣文館 大9・2・5 2円50銭) 13 問題の  
新宗教大本教の批判(服部静夫 新光社 2円) 14 労働問題と普通選挙(馬場恒吾 民友社 50銭) 15 男女争闘史(堺利彦 栄川堂書店 大9・4・10初版 4・15再版 1円60銭) 16 恋愛と結婚(エレン・ケイ 原田実訳 天佑社 2円40銭) 17 劇史井伊大老の死(中村吉蔵 天佑社 大9・6・7 2円20銭) 18 自由の道 (小林一郎 大同館 2円50銭) 19 続ロダンの言葉(高村光太郎 叢文閣 大9・5・28 2円70銭) 20 政治の理想(バートランド・ラッセル 松本悟朗訳 日本評論社出版部 大9・2・5 1円50銭) 21 山田

- 憲公判実記(岩村霞村・辻湖東編 銀座ニユース社 1円) 23 海外 発展 開くべき新天地(大谷光瑞 広文堂 90銭)
- 24 マグダラのマリア(メーテルリンク 和氣律次郎訳 玄文社 大9・2・25 80銭) 25 友情(武者小路実篤 以文社 大9・4・20) 26 仏蘭 仏蘭 二人行脚(日下部四郎太 大日本雄弁会 3円) 27 経済学研究 前編・後編(福田徳三 同文館 大9・2・10 12円) 28 外務省官吏試験問題答案集 29 株式思惑の極意(下村武大 投資之世界社 1円40銭) 30 手形割引譲渡引受

この順位に対するコラムのコメントには、「経済書が文芸書を乗越して第一位の売高を占めたこと、文芸書が依然総括すれば最大多数の売行部数であること、『山田憲公判実記』『思惑の極意』や『井伊大老の死』や『大本教の批判』など、いふ新聞雑報の影響否御利益をしたゝか蒙つてゐると思はれる書籍の売行、これらの事がどうも見脱しならぬ現象のやうである」とある。実際、同日に掲載されたコラム「図書室便り」には、「昨今最も売行の素晴らしい本は天佑社の『井伊大老の死』と新光社の『大本教の批判』である。例年出版界の霜枯月と云はるゝ当節に之等はレコード破りと認められる」とあった。また、八月一日の「ビールの泡」には、中村吉蔵が「井伊大老の死」一万部の印税として二四〇〇円を受け取つたという噂が載っていた。ただし、順位を述べた最後には、印刷料の値上げと不景気の影響の為に「昨年の上下両半期に比し本年上半期は書籍全体の売高が低下した事を追記して置く」というコメントも添えられていた。しかし、周知のように、島田清次郎の『地上』は大正期の一大ベストセラーの一つであり、第二部は「初版一万部が二日間で売切れ、三月までに四万部を発行」(『新潮社八十年図書総目録』)したといわれる。

同じく東京堂小売部調べの、一二月一六日までの下半期の順位をみてみよう(「本年の出版界」12・19)。ここ

でも、1、2位が「其売行部数に於て遙かに他の群書を抜いてゐる」という注記があった。

- 1 象牙の塔を出て(厨川白村 福永書店 大9・6・22初版 8・15二三版 2円80銭) 2 大戦後の世界と日本(徳富蘇峰 民友社 大9・10・3 3円50銭) 3 現代研究講演集(民友社編) 4 叢書 欧州思想大観(金子筑水 東京堂書店 大9・10・20初版 大10・10・25一版 2円80銭) 5 美貌の友(モウパッサン 広津和郎訳 天佑社) 6 叢書 社会改造の八大思想家(生田長江・本間久雄 東京堂書店 大9・11・22 2円80銭) 7 死線を越えて(賀川豊彦 改造社 大9・10・3初版 大10・7・7八五版 3円) 8 外来思想と我國民道徳(深作安文) 9 ジャン・クリストフ 第一巻(ロマン・ロラン 豊島与志雄訳 新潮社 2円50銭) 10 処世哲学(シヨウベンハウエル 増富平蔵訳 玄黄社 大9・8・14 2円80銭) 11 旅する心(有島武郎 叢文閣 大9・11・18 1円10銭) 12 新思想の批判と主張(大島正徳 青年教育会 大9・10・5 3円) 13 新人の使命(吉野作造) 14 現代の商業及商人(福田徳蔵 大鏡閣 大9・11・20 1円90銭) 14 ボヴレイ夫人(フロオベール 中村星湖訳 新潮社 大9・11・28 3円) 15 現代小説選集(島崎藤村・長谷川天溪他編 新潮社 大9・11・23 3円80銭)

下半期の傾向に対しては、「労働問題や社会問題の流行的出版」は上半期で「其売行の鋭鋒が挫かれてゐる」こと、「一般娯楽雑誌」の中には廃刊したり、発行部数が低下したりする雑誌がある一方で、高級化がはかられて「通俗な娯乐的読物の向上が萌し」ていること、「文芸的著作は殆んど一向打撃を蒙らないと云ひ得るほどの好況にある事」、「婦人雑誌界が旭日昇天の勢」であることというコメントが付されている。なお、「図書室便り」(8・15)によれば、『象牙の塔を出て』は「昨今既に一万二三千部の売高を見た」と云ひます」とある。

『死線を越えて』は「三巻約六百版、九十万部を売ったといわれ」（『新潮社八十年圖書総目録』）している。  
 以上の資料から、大正九年までには、出版業が優良なビジネスに成長し、中でも 文学 出版は優良株で、安定した右肩上がりの市場を形成していたと判断できるのである。

2

「読売新聞」には、ビジネスとしての出版業に注目した企画として、大正一〇年まで断続的に連載されたコラム「出版界の人物」がある。企業家としての紹介と同時に、まさに起業家としての彼らにスポットを当てた内容となっている。富山房の長谷川福平（8・22）から始まる、このコラムには、「一発当てた人物」が少なからず登場した。ここでは、大正九年に紹介された出版人を見ていくことにしよう。<sup>(注6)</sup>

雑誌『雄弁』の野間清治君（8・29）

新潮社の佐藤義亮君（9・5）

アルスの北原鉄雄君（9・12）

聚英閣の後藤誠雄君（9・19）

隆文館の草村松雄君（9・26）

天佑社の宮本富士一君（10・3）

東京刊行社の久保勲三郎君（10・10）

精華書院の大村謙太郎君（10・17）

培風館の川村理助君（10・31）

改造社の山本実彦君（11・7）

北原鉄雄は、三宅克巳の『趣味の写真術』、『写真のうつつし方』を「孰れも既に五万部を売り尽くしたと云はれ」、『白秋小唄集』は一五版を数え、四月創刊の三宅克巳・高桑勝雄の『写真術講習録』には五〇〇〇名の会



員がいるとされている。

後藤誠雄は、正六位勲六等海軍少佐で、待命を命ぜられて後、大正八年一〇月頃から活動を開始し、処女出版が武者小路実篤の『第一の母』で、発売実数一〇〇〇〇部の『芭蕉全集』、初版・再版五〇〇〇部ずつの島田清次郎の『早春』を発行している。

天佑社では、エレン・ケイの『恋愛と結婚』、ウィルソンの『新自由主義』、井伊大老の死』が「各々七千乃至一万の発売実数」があるとされている。

大正八年六月創立の東京刊行社は、『クレオパトラ栄華物語』一七〇〇〇部、『哲学総論』二〇〇〇〇部は「蓋し欺かざる発売部数である」と云ふ」とされ、『多情多恨楊貴妃哀史』は「坊間の売れッ兒」で、『哲学叢書』全一二巻も好評であるという。

改造社については、『死線を越えて』が七〇〇〇部を越えたことが報じられていた。

また、文学書が大きな市場を持つていたことを示す証拠として、海外文学の翻訳を中心とする全集・叢書類の激増ということをおげることができるだろう。「全集と叢書と最近激増の傾向」（10・3）によれば、予約募集したばかりのものに、『杜翁記念文庫』（春秋社）・『マーテルリンク全集』、『ユーゴー全集』（冬夏社）・『ロマン・ロラン全集』（人間社）があり、最近第一巻を刊行したばかりのものに、『モウパッサン全集』（天佑社）・『ハイネ全集』（越山堂）・『白秋詩集』（アルス）・『近代劇選集』（新潮社）がある。完結した『ワイルド全集』（天佑社）を除いて、目下刊行中のものに、『トルストイ全集』（春秋社）・『ドストエーフスキイ全集』（冬夏社）がある。そして新潮社の「所謂十叢書」『ドストエーフスキイ全集』・『チエホフ全集』・『ツ

ルゲネフ全集』・『ニイチ工全集』・『エルテル叢書』・『代表的名作選集』・『新進作家叢書』・『縮刷独歩叢書』・『泰西伝奇小説叢書』・『泰西名詩選集』・『晶子短歌全集』 を含めれば相当数の文学関係の全集類が市場に供給されていたことになる。この記事には、「如何に大戦後の我読書界が海外文芸を憧憬して已まざるかに驚くの外はない」というコメントが付されていた。

このように文学書はよく売れる商品<sup>(注)</sup>だった。しかし、利益ほどの程度のものなのだろうか。新潮社の事例から、流行性感冒のために一時危篤になった病床の小川未明を見舞うために発行された『十六人集』(大9・2刊)と田山花袋・徳田秋声の誕生五〇年を祝って発行された『現代小説選集』(大9・11刊)をみてみよう。前者は片上伸や相馬御風の編で、印税八〇〇円を未明に贈り、後者では初版一万部の印税の中から三〇〇〇円を花袋・秋声に贈ったとされる。新潮社もこれらの著作に関わった文学者たちも、この程度金額は出せたわけである。前者の慈善事業的性格や後者の文壇の長老に対する顕賞的性格を割り引いたとしても、驚くべき事態ではあるまいか。また、雑誌出版の雄である講談社の事例でいえば、大正九年に五〇万円で音羽に新社屋を購入したことであろう。『講談社の歩んだ五十年(明治・大正編)』(昭34・10刊)には「この大正九年のパニツクをよそに、講談社は飛躍の発展をとげて、護国寺前に広大な土地を求め、これまでの団子坂時代から、いうところの音羽時代に入る基礎が作られた。」とある。

こうした出版界の好景気を支えたのは、何であつたのだろうか。読者の購買欲をはじめ、幾つかの要因<sup>(注)</sup>が考えられるが、本稿では、その大きな原因として大正八年以降に確立されようとしていた新しい出版販売のシステムに焦点をあててみたいと思う。(以下の記述は『東京堂の百年』などを参考にしている。)

近代の出版販売の歴史は雑誌・図書の乱売競争、割引競争の歴史でもあり、原価を切って売るといったことが常態だった。これではいくら売ってもさほど利益があがるはずはなかった。その状態を改善するために、東京堂の大野孫平が中心となって東京雑誌組合が結成されることになった。東京雑誌組合は取次と雑誌発行所が一体となって、大正三年三月二四日に結成された。ねらいは当然、定価販売である。幹事は、雑誌発行所側から、時事新報社・実業之日本社・同文館・東京社・富山房・中央公論社・市町村雑誌社・博文館、取次からは東京堂・北隆館・東海堂・至誠堂・文林堂・良明堂・上田屋の、計一五社であった。なお、東京雑誌組合は七年一月に「東京雑誌協会」と改称し、一三年七月に「日本雑誌協会」と改称されている。

大野は定価販売を推進させるためには、小売業者の理解と協力が不可欠であると考えて、元取次業者と小売業者とで、三年四月七日に雑誌販売業者組合を設立させた。ただし、定価販売の即時実現は困難とみて、段階的に実施する方針をとることになった。そして八年二月から定価販売が実施されたのである。なお、雑誌の場合、販売制度が「買い切り制」から「返品自由制」・「委託制」に変わり、それが大正期の販売部数の躍進を支える大きな柱となった。

また、忘れてならないのは、元取次業者同士の協定である。卸業者同士が得意先の争奪戦を始めれば元の木阿弥になってしまうからである。大正五年三月、大野の主唱で、雑誌元取次六店（東京堂・東海堂・北隆館・至誠堂・良明堂・上田屋）が新しい契約書を取り交わして、業界の安定を図った。こうしたシステムの整備の結果、東京堂の大正五年度の売上金額は初めて二一〇万円台に突入することになったのである。

雑誌を中心とした新しい動きは書籍の販売にも及んでいった。雑誌の定価販売の動きに対応して、東京書籍

商組合は大正八年一月から規約修正委員会を作つて研究に努めて、七月二日に臨時総会を開いた。その結果、大きく改正した規約と新たな販売規程を議決し、一二月一日から、定価販売を実施することになったのである。新規程は「組合員の出版または専売（組合員外の者の出版物で組合員の一人に販売を依託したもの）の図書には、必ず奥付に定価を記載し、組合員はその奥付に記載された定価で販売しなければならぬことを明らかにした」（橋本求『日本出版販売史』昭39・1刊）のである。また、「東京書籍商組合は、全国の書籍販売業者に対し、組合をつくつて定価販売に同調することをすすめて、同調せぬ書店とは取引しない方針を明らかにした。そこで、全国の販売業者も必要上からこれに賛同し、各府県または有力都市に定価販売を実行する書籍商組合ができ、これが連合体とし、大正九年五月十七日に『全国書籍商組合連合会』の創立を見たのである」。（同前）

大正八年以降の販売制度の整備が、大正九年の不況知らずの出版界を支える重要な柱となつたことは確實だろう。東京堂の売上金額は、大正七年には三一〇万円台、八年には四八〇万円台、九年には七四〇万円台に達していたという。印刷料・紙価の値上がりに伴う、定価の値上げとの関係もあるので、単純にこの金額に比例して市場が拡大していったとはいえないが、そのことを割り引いて考えたとしても、新しいシステムが出版というビジネスを支えたことは決定的であろう。

## 3

文学 出版の好調さが文学者 特に小説家にもたらしたものは、端的にいえば、経済的安定であつた。

この点について、近松秋江は「年の暮れ文士貧富論」(『時事新報』大11・12・21)の中で皮肉まじりにこう述べている。「この文壇ばかりは存外に不景気風も吹いて来ぬらしい。事実今日の文士の経済状態が豊になつて来たことは、之を十五年二十年前独歩などが生活難に困窮したり、眉山が自殺したりした時代に比すれば実に隔世の感がある。(中略)あの時分に比べて何十倍と出版物の盛大になつた今日では、もう書肆や雑誌社の方で書く物にそんな贅沢をいつてゐないで、大抵の物ならば、ほとんど需要して拵へて行くから、少し名を売り出しさへすれば、筆を取つて、どうか斯うか生活して行ける時代となつた。(中略)文運の隆盛なること、日本開闢以来今日の如きは無からうと思ふ。碌々学校もやらない島田清次郎が僅に二十二か三歳で一挙にして数万円の印税を贏ち得たなどは、漸く十八九歳の前垂れ掛けの小僧でも巧く一つ当れば一夜にして忽ち、巨富を成すことの出来る相場師仲間以外にはとても見られぬ図である」。

印税成金と騒がれた島田清次郎に対する言及は、例えば、「本年廿三歳の島田君の預金が川崎銀行に五万円尚続々その『地上』第一部乃至第三部から上つて来る月々の印税千円を下らず」(『書架の前』大10・11・20)といったゴシップを受けてのものといつてよいだろう。しかし、近松秋江が本気でばやいているのは、彼自身に「初めて税務署から決定書をさし付けて来た」という事実である。彼自身も「文運の隆盛」の余慶を被つていたのである。そして忘れてならないのは、秋江は「十五年二十年前」と大正一一年を比較しているが、「文士の経済状態が豊になつて来た」のが、実際には、つい最近であるということだ。例えば、ほんの六年前、内田魯庵の「文人美術家の生活」(『太陽』大5・6)に端を発する論争があつたが、議論の前提は「今日の文人芸術家及び物質と直接交渉せざる学者の大部分は各々多少の度を異にして生活難に苦まされざるは無」(註一)といつ

ものであつた。生田長江・齋藤与里・石坂養平・長谷川天深らも参加した論争であつたが、前提自体は自明のものとしてほとんど疑われることはなかつたのである。

急速に展開した 文学 出版と文学者の経済的な安定ぶりを社会的に誇示していたのは、富士印刷株式会社だつたのではなからうか。大正九年六月二六日、新潮社は相次ぐ印刷費の値上げに対抗して姉妹会社として小石川区西江戸川町二一番地に資本金七十万円で富士印刷株式会社を創立した。取締役社長に新潮社の佐藤義亮を仰ぎ、「文芸物」の印刷と、「自費出版の発行発売」を謳い文句にした、「文壇印刷会社」という異名のあるこの会社には、文壇画壇から約四〇人が株主になつていたのである。芸術家たちは、新潮社の出版物によつて得た収入で株主となり、その配当を受ける。一方、新潮社は、自分の投下した資金を別の形で回収してつたというわけである。まさに資本の見事な循環が存在していた。当時のゴシップにはこうある。「今度、新潮社が主になつて、印刷会社を設立し、文壇の諸氏にも株を持つて貰つたが、それは何万円と云ふ額に上つたと云ふ。尤も文士と云つても皆な貧乏ではない。名門の人や、富豪の息なども可なりある事だから敢て不審とするに足らないが、原稿稼ぎだけでやつてゐる人が何百株と買つた人が多いのはよほど景気が好いと見なければならぬ。それも老大家よりも新作家の方がよいさうである。文士は清貧に甘んずるなどと云つたのは昔の話である」(「文壇風聞記」「新潮」大9・6)。

株主となつた文学者を「文士会社の配当」(大10・6・26)という記事によつてあげてみよう。「有島武郎、同生馬、三島章道、近藤経一、長田幹彦(以上百株) 里見淳(七十株) 志賀直哉、上司小剣、菊池寛、久米正雄、芥川龍之介、近藤浩一路(以上五十株) 吉田絃一郎、中戸川吉一(以上四十株) 平福百穂、長田秀雄、加能作次

郎（以上三十株）徳田秋声、田中純、吉井勇、岡本綺堂、楠山正雄、本間久雄、宇野浩二、室生犀星、細田源吉、宮島新三郎、土岐善麿、水守亀之助、加藤武雄（以上二十株）。「何百株」というのは大げさのようだが、確かに「原稿稼ぎだけでやつてゐる人」も入っている。そして、彼らの資金投下は成功したといわざるを得ないだろう。なぜなら、創立一年後、この会社は「資本金約三割強の利益を挙げ、年一割の配当をなし」（文士会社の配当）たのだから。

この経済的安定は、必然的に文学者の生活様式を変えていくことになった。文学者の職業化である。少なくとも、小説家という 魅力的 な職業が安定した収入を前提として成立することになった。中村星湖は次のように分析した。「芸術が、殊に小説が近来著しく職業化して来た事は、いろんな方面から観察する事が出来るが、日本人一般の文化の程度が高くなつた事、方々の営利雑誌で小説を競つて載せる事、新聞もまたさうである事、つまり小説の需要が多くなつて、その原稿料も自然、可なり高くなつたので、小説書きが職業として十分立ち行けるやうになつたのが、何よりの原因であらう。十年もしくは二十年以前には、小説家と云ふ者はあつても、小説を売るだけで生活し得る者はほんの僅かで、余は好きからその道へ足を踏入れ乍らも、何か他の職業で口を糊して居たものである」（最近小説界の傾向 特にその職業化に就いて）（三） 大10・10・3。

星湖がこの文章で指摘するように、「小説の職業化を証拠立てる、一番はつきりした現象は『小説家協会』の設立」だろう。小説家協会は大正一〇年七月一六日に菊池寛によって、組合員の共済を主な目的として創立された。<sup>（注12）</sup> 勿論、小説家協会創立以前に、八年六月一八日に発起人会が開かれた著作家組合、九年五月八日に発足した劇作家協会も存在していたわけであり、この二つの団体の成立もこれまで述べてきたことと、明らかに

連関している。しかし、小説家協会の参加資格が、「一、著名なる文芸雑誌乃至新聞に五篇以上の小説を発表したることあるもの。二、小説の単行本を二冊以上発行したることあるもの。(自費出版を除く)」とあるように、明確に職業組合としての色彩を帯びていることに注目するべきだろう。上司小剣の回想に、「どうして小説家協会といふ名でこの会が起つたかと言へば、当時文章を書いてそれがともかく物質生活の職業になるのは、小説だけであつたからで、『組合』といつたやうな意義も、小説家だけに認められるといふふうであつたがためである。」(「当初小説家協会のころ」『文芸年鑑 二六〇三年版』昭18・8刊)とあることも見逃せない。

中村星湖は「小説の職業化」から必然的におこると思われていた「墮落」を心配していたのだが、同時代の青年たちの目には、小説家は 魅力的 な職業と映っていたようである。彼らの多くは、第二の江馬修、第二の島田清次郎を夢見て、小説を書いた。近松秋江のいう「漸く十八九歳の前垂れ掛けの小僧でも巧く一つ当れば一夜にして忽ち、巨富を成すことの出来る相場師仲間以外にはとても見られぬ図」をめざしたわけである。そのブームを仕掛けた新潮社の佐藤義亮は、「それが(江馬修の『受難者』のヒット)天下の青年に、異常の刺戟を与へ、長編一つ当れば、『文学的成功』、もつと下品な言葉で言へば『文学的成金』になれるといった気持ちの一部青年に起さしたことは否めない。それから暫くたつと、無名の青年から、三百枚、五百枚といった作品が続々、文字通り続々送つて来られるには驚いた。」と回想している。(「出版おもひで話」『新潮社四十年』昭11・11刊)

当時の文壇をとりまく風景を、上京した宮沢賢治は、「図書館へ行つ見ると毎日百人位の人が『小説の作り方』或は『創作への道』といふやうな本を借りやうとしてゐます。なるほど書くだけなら小説ぐらゐ雑作ない



ものはありませんからな。うまく行けば島田清次郎氏のやうに七万円位忽ちもつかる、天才の名はあがる。どうです。私がどんな顔をしてこの中で原稿を書いたり綴ぢたりしてゐるとお思ひですか。どんな顔もして居りません。」(大10・7・13付関徳弥宛書簡)と苦々しげに報じている。<sup>(注)</sup>また、文壇登竜門としての同人誌の流行や作家の偽者が出現して詐欺事件などを起こしたのもこの頃からである。

大正一〇年六月一九日の「読書界出版界」は、「文芸同人雑誌」と題した記事を載せ、約六〇誌の同人雑誌の「誌名並に編輯兼発行人の氏名を総目録式に紹介」している。その時の前書には「……痛々しいほど真剣な努力が見出さるゝ点に於いて文芸関係の同人雑誌は決してく等閑視さるべきではない。其等の中には所謂『現文壇知名作家』の故郷であり母校である物もあれば、また所謂『文士の卵』なるものが現在孵化されんとしつゝある物もある」とあって、「痛々しいほど真剣な努力」を強調していた。しかし、同時にこの紹介と裏腹に、例えば、「文章倶楽部」(大9・12)の特集「同人雑誌の思ひ出」のように、「文壇へ出る方法としては種々あるが同人雑誌に拠るのは、最も有利な方法である。」とする認識も存在していた。同時代の人々のまなざしには、同人雑誌は後者の性格を濃厚に示していると映ったようである。

柏通明の「同人雑誌に就ての偶感」(大10・8・25)では、お手軽に文壇に出るための踏み台として機能している同人雑誌の性格を指摘し、そういつた作家を受け入れてしまふ文壇の現状を嘆いていた。また、「たつみ」という筆名で掲載された「文壇の批難と同人雑誌」(大10・9・8)では、「自らの独自の世界を開拓し、新らしい文芸の先駆をなさんと志す、より強き信念があるべき筈」の同人雑誌が「文壇にでるミーンズ」になつてしまわないようにする、同人の「固い自覚」が求められていた。

「固い自覚」のない者たちの中には、文学者の偽者となって世情を騒がした青年もいた。被害をよくうけていた江馬修は当時のことをこう回想していた。「たしか一九二〇年だった。私はもういくつかの長篇を発表して、いわゆる人気作家のひとりになっていた。しかしまだ三十前後の若さで、風采を真似やすかつたせいがよくあちこちへ二セ者があらわれて、女をだましたり、金を詐取したりするので非常に迷惑したものである。こんな事件が立てつづけに五つも六つも起つた。この年にも、東北の花巻温泉に着以来二セ者の江馬修なる小説家が二カ月あまり滞在して、宿の女中をだまし、湯治の女たちを誘惑し、その上あちこちの客から衣類と大金を借り集めて逃亡した事件が起つた」。(『一作家の歩み』昭32・6刊)

或いは、「文章倶楽部(大9・9)の「文壇風聞記」には、鈴木三重吉の偽者が出現したことを伝えるこんな記事があつた。「これも文学者が社会的勢力を得て来た一つの例証とする事が出来るであらうか。近頃、文士のにせ物がちよいくと出て来て、地方人に一ぱい食はせる。その著しいのは、二月許り前に信州沓掛温泉に現はれた偽鈴木三重吉で、その温泉宿の主婦が大の三重吉崇拜なところから、天晴三重吉になりすましての持て塩梅は一方ではない。処の新聞に小説をのせたり、警察署長に頼まれて祭文か何かを書いてやつたり、小学校に招かれて講演をやつたり ところで此の偽三重吉先生、なかくの才物と見えて、小説も、祭文も、講演もなかくうまいので、一月ばかりの間とく馬脚を現はさずに通したとはウソのやうな話である」。宇野浩二はこうした状況を小説化して、『二人の青木愛三郎』(中央公論 大11・10)を書いている。

こうした事件は、一方で、その名を騙るだけで、一般の人々が信用するほど、文学者が「社会的勢力を得て来た」ことを意味している。「社会的勢力」の大きな柱は金銭だと考えられるが、「講演」活動をした偽三重吉

の行動からわかるように、この時期、文学者たちは、文化的な価値を担う存在へと変貌し、また社会的にそのような存在であることを承認されたのだった。「近頃、注目す可き現象は、文壇に講演が流行る事である。(中略)これは、今や、普通選挙の叫びの盛んな弁論時代の、その時代の反映でもあらうし、文芸の社会化といふ事から来た当然の結果でもあらうし、又、一般民衆の文芸乃至文芸家に対する親愛の増加した一つの証拠と見る可きものでもあらう。何にしても考ふ可き事である。現に、此の夏期には、東洋大学の文芸部に於ける島崎藤村氏等の講演、早稲田大学に於ける早稲田文学社同人の講演、関西地方に於ける人間社同人の講演などが行はれた」(「最近文壇のいろく」(1)、「文章倶楽部」大9・9)。

## 4

大正九年の文壇のイベントは、いうまでもなく、一月二三日に行われた田山花袋・徳田秋声の誕生五〇年祝賀会である。高見順は『昭和文学盛衰史』(昭33・3、11刊)ただし、引用は文春文庫による。)の中で、この祝賀会を、「あたかも十一月の日のように暮れるのが早かった大正時代の、その黄昏に面した大正文学の最後の夕映えを象徴するものとして見ていいのではないか。」と述べている。有名な断案である。しかし、同時代の出版社や文学者にとつての意味は高見のいう「文壇行事」にとどまっていなかった。そこには、文学 を社会に認めさせようとした 文学 の側の意気込みがあった。例えば、「文章倶楽部」(大9・2)には「本年は、田山花袋、徳田秋声両大家の誕生五十年に当る。これを機として、この両大家の長の間の労苦と文壇に対する

貢献とに対し国民的感謝の意を表す可く、何等かの企てを催さつといふ議が、島崎藤村氏等から持出された。従来日本の社会には文学者に対する尊敬に於て欠けたところが多かつた。文学の眞の価値文学者の眞の使命について十分の理解する事が出来ず、従つて文学者の事業を等閑視し、文学者を蔑視するに馴れてゐた。しかし、今や文学といふものが、漸く社会的に認めらるゝに至り、文学者亦漸く世の重ずるところとなつた。此時に方り、此の拳を聴くはまことに欣びに堪へない。」（譯）文壇いろく（註）と、その意気込みを語る記事が掲載されていた。また、菊池寛も「文学」の現状認識が異なるものの、声高にその意義を唱えた。

秋声花袋の二氏が、本年を以て五十歳の誕生日を迎へられるに就て、文壇の一部で祝意を表したいと云ふ企があるとの事である、それに対して、自分も賛意を表したいと思ふ。

文芸に携はると云ふ仕事ほど、酬はれない仕事はないと思ふ。その癖、花袋氏や秋声氏の仕事と、山川健次郎氏や嘉納治五郎氏の仕事と、孰ちらがより多く日本の眞の文化に貢献したかと云ふと、可なり問題だと思ふ。

此人達の作品に依つて、どれほど多くの青年が人生を本当に理解し、人生を如実に見ることを会得し、人間をその在るが儘の姿に於て知り、人生の殻や偽りを脱することを得たか判らないと思ふ。かう云ふ仕事や、政治家の仕事や、教育家の仕事や、軍人の仕事に比して、上品で本質的で立派である事を、誰人が否み得よう。

（中略）徳田秋声田山花袋二氏の如く、長い間国民の文化に貢献した人々に対しては、国家が相当の敬意を表する事が、当然な事であるが、今更現在の無理解な、文芸を解し得ない政治家などに、運動をして

も、仕様のないことであるから、我々真に此人達に敬意を表し得る者丈で、祝意を表するのも又止むを得ないと思ふ。（「秋声花袋」二氏の事「新潮」大9・3）

この祝賀会は 文学 を社会に認めさせるといふデモンストレーションとして行われたものと考えられる。そしてそれは成功したといわざるを得ないだろう。何よりも、記念に発行された『現代小説選集』の一万部という発行部数、印税三〇〇〇円の贈呈という事実、翌年の小説家協会の創立など本稿で見えてきたさまざまな事柄が成功を物語っているといえよう。前述の高見順の断案は不十分といわざるを得ない。「文章倶楽部」のいうように「今や文学といふものが、漸く社会的に認めらるゝに至り、文学者亦漸く世の重ずるところとなつた。」のである。このことは、同じ時期、ホットな話題であつた「文芸の社会化」をめぐる議論にも実は盲点があつたことを暗示している。

この議論に積極的に発言した江口渙は、「文芸の社会化と云ふ言葉は、文芸の内容が社会性を帯びると云ふ意味と、文芸の需要乃至は販路が社会の全般に行き届くと云ふ意味との二つに解釈される。但し私がここに云ふ文芸の社会化と云ふのは、無論前者の意味である事を断つて置く。」（「文芸の社会化とその得失を論ず」大9・5・21）と述べている。当然とも思われる方向づけであるが、しかし江口がふれなかつた後者こそが 文学 を社会に根付かせた、最も重要なエネルギーであつたのだ。我々は江口が捨てていった「文芸の需要乃至は販路が社会の全般に行き届る」ことの意味 いわば 社会の文芸化 の意味を明らかにする必要があるだろう。大正九年、文学 出版が成功したことは、文学作品が商品として自立したこと、それによって文学者が経済的・文化的側面で社会的な地位を獲得したことにつながつていった。ブルデューがいうところの 文学場

が自律したのである。

私は、ゾラの言葉を引用したブルデュールの文章で本稿を締めくくりたい。本稿はこの言葉によって導き出されたものである。

文学・芸術場がその自律性を明らかにするにつれて、芸術と金銭の対立が支配的世界観の基本構造のひとつとして前面に出てきたが、この対立は、行為者はもとより分析者にとつても（特にその専門分野および／またはその文学的傾向によって、彼らが十八世紀の芸術家の存在状態について理想化されたイメージを抱いている場合）、ゾラが言っていたように、「金銭が作家を解放し、金銭が近代文学を創った」という事実を見えなくさせてしまう。ゾラはじっさい、ボードレールが使っていたのときわめて近い言葉で、貴族の後援者や公権力への従属から作家を解放したのは金銭であることに注意をうながし、芸術家の天職に関するロマン主義的な考え方の支持者からの批判にたいして、金銭支配が作家に提供するさまざまな可能性についての現実主義的な見方をもちだしてみせる。「後悔の念も幼稚な反発もなしに、それを受け入れなければならない。金銭の気高さ、力、正しさを認め、新しい精神に身をゆだねなければならない……」。(石井洋一郎訳『芸術の規則』 平7・2刊)

(注1) タイトルが「読書界出版界」となったり、大正二一年以降 月曜付録になったりするなどの変動はあるものの、掲載が続いた。大正二三年九月二日から二月二日にかけて拡大独立して別紙に移ったが、年末には再び月曜付録に組み込まれた。しかし、大正二四年四月からは拡大独立して毎日掲載された。なお、このコラムに関連する記事に、「出版界だより」、「書架の塵」、「書架の前」、「図書室だより」、「読書顧問」、「新潮社週報」などがあった。

(注2) 雑誌の配給の場合、大正八年の段階で、元取次は東京堂・東海堂・北隆館・良明堂・盛春堂・上田屋・文林堂・至

誠堂の八社に限定されていたのであるが、書籍の配給ルートは複雑であった。橋本求は『日本出版販売史』（昭39・1）の中で、大正一四年以降の寡占が進んだ、四大元取次中心時代の書籍の配給をこう説明している。「書籍だけの元取次をする店は幾つもあり、多くの書籍は四大取次のほかに、これらの中級取次店を通じて各地書店に送られ、あるいは発行所から直接書店に送られた。出版社によっては、全国的に取次または有力書店を選んで特別契約を結んでいるものもあった。／ほかに、明治以来せどり屋と呼ばれた小取次業者は、大正、昭和を通じて活躍していた。これは、得意先の書店をたえず廻って日々の注文を集め、それを発行元や取次店から仕入れて届けるというこまめな商売だったが、書店に重宝がられ、欠かせぬ役割を果たしたのであった。したがって、元取次の最大手の東京堂の資料を中心に語る、「読書界と出版界」であつても、寡占体制がそれほど進行していない大正中期の出版界の状況の把握については若干の留保が必要になつてくるように思われる。

〔注3〕 飯田祐子は、自然主義が小説家の「職業化」をもたらし、「金」による逆規定をつけていた「文学」という領域は「その束縛から抜け出」て、『小説家』は、賃金労働という観念とは抵触しない形で報酬を得る特殊な職業となる」と鋭い指摘をしている。しかし、本稿で確認していくように、金銭的な次元で小説家が職業として自立し得たのは、大正八年以降である。その意味では、新聞社の社員でしかない夏目漱石、彼の『道草』と自然主義を軸にすることは、その後におこつた本格的な変動を見逃してしまうことになるように思われる。

〔注4〕 拙稿「大正八年 イデオロギー批評の試み 芥川龍之介を視座として」、『学習院大学文学部研究年報』第42輯 平8・3）を参照されたい。

〔注5〕 この神話を実証的に確かめようとしたものに、鈴木敏夫の『出版 好不況下 興亡の一世記』（新訂増補版 昭47・6）がある。ちなみに鈴木は「結果的にいって、明治のそもそものはじまりから、『出版は、やはり不況に強い』（好況期にはかえって、さほどでもない）すくなくとも、不況の影響を受けることはあつても、かなり遅い時期においてであり（したがって短期不況には超然としていられる）、その影響の度合いも他産業よりは、はるかに少ない。」という結論を出している。

〔注6〕 大正一〇年の「出版界の人物」で紹介された人々を以下に示す。

冬夏社の鷲尾浩君（1・16）

獅子王文庫、田中巴之助君（1・23）

越山堂の帆刈芳之助君(2・6)

中央出版協会、下山儀三郎君(4・3)

白水社の福岡易之助君(4・17)

『最近思潮叢書』の鶴岡五郎君(5・15)

山縣製本工場主山縣純次君(6・19)

金尾文淵堂、金尾種次郎君(2・20)

世界文庫刊行会、松宮春一郎君(4・10)

空中文明に熟する東浅吉君(5・8)

『仏教経典叢書』の仲摩照久君(6・5)

(注7)

こうした書籍の商品性を最も露骨に浮き彫りにしているコラムは、「原稿が本になるまで」(大9・5・2)だろう。このコラムは、一冊の本を出版するのに、どのくらいの資金が必要で、どのくらいの実費がかかるのか、ということレポートしている。コラムの計算は、原稿が四六判の本で五百頁の分量あり、それを自費出版で一千部印刷するという前提である。以下、その方程式を示す。

「印刷費」植字料一頁……四六判(一冊) 八〇銭に値切る 四〇〇円

一千部として一頁の刷賃……四六判(一毛四朱) 四六判五百頁千部の刷賃二二〇円

「紙」四六判全紙一枚 四六判一頁大が三二とれる 六四頁

四六判五百頁千部 一六連(一連は全紙五〇〇枚)

紙質 一連五〇斤のもの、紙価 一斤四〇銭位のもの 三三〇円

「製本」普通のクロースにして一冊の製本代今日のとこ三二二銭 二二〇円

自費出版にかかる費用は一〇六〇円ということになる。したがって、一部についての実費は一円六銭である。そして「これに利得を算入し取次販売へ提供する分割(普通は定価の二割五分)をも加算して一部の定価を決定する。」のである。

(注8)

『講談社の歩んだ五十年(明治・大正編)』には、「経済的不況は、出版界に影響を及ぼすことが、最もおそいといわれるのは、これを『たのしむ』ことが最も軽便安価なので、他の消費が節約されて、最後に『小使銭』がここに集まるためと解されている。そこで一般財界の不景気とは反対に、出版界はその時期において、かえって好況を呈することが恒例で、その出版界に不景気のきたときは、財界の不景気は底をついて、復活のきざしが現われかけた時といわれる。」という説明がある。『東京堂百年の歩み』(平2・5刊)には、「書籍は雑誌に比べて、飛躍的な発展は見



られなかったが、読者人口の増加は、おのずから書籍出版にも好影響を与えた。また明治末期から大正初期にかけて、全国に図書館が増設されたことや、大正七年、大学令が公布され、八年から連続事業として全国に高等学校・実業専門学校が三十校も増設されたことなど、高等教育の拡充は、専門書籍の出版をうながしたばかりでなく、青年・学生の読書力を高め、文芸・思想・科学などの教養書の売行きを著しく増進した。」という指摘がある。

（注9） 注2でも言及したが、書籍の販売ルートは複雑で、完全な統制が即時に実行されたわけではない。また、新規程には地本商を例外とするなどの措置も取られていた。しかし、定価販売は橋本求の分析に従えば、「しだいに軌道にのり、大正一三年ころから「各地方の書籍と雑誌の両組合が合同一本化する傾向が目立」ち、「体制強化」がすすんでいくことになった。

（注10） このような税金をめぐるトラブル(?)はこの時期の文学ゴシップの重要な話題である。例えば、上司小剣は「著作物に対する不定の報酬は課税の目的物となるべきや」(大9・11・30)という文章を寄せた。彼は「先月末品川税務署から三千円の決定書を送られ(従来六百円でしたから突然五倍になったわけです)再審査を請求しても間に合はんで、其のまゝ二回納め」というのだ。この頃から、税務署が文学者たちの収入の伸びに注目し始めたのではあるまいか。ちなみに、週刊朝日編『値段の風俗史』上によれば、大正九年、内閣総理大臣の月給は一〇〇〇円、小学校教員の初任給は四〇〇〜五五〇円、東京府知事の年俸は六〇〇〇円、国会議員の年額報酬は三〇〇〇円、銀行員の初任給は四五〜五〇〇円であった。

（注11） 魯庵は続けて「文人美術家の生活(再び)」、「太陽」大5・7)を発表、それらに対して、生田長江は「文人生活の似而非理解に対する憤激」(「新小説」大5・8)、齋藤与里は「内田氏の文人美術家の生活を読んで氏に与ふ」(「太陽」大5・8)で反論し、議論をまとめる形で、石坂養平が「文人美術家の生活に就て」(「時事新報」大5・8・18、19、22)を、長谷川天溪が「芸術家の態度を確立せよ」(同前 大5・8・30、31)を発表した。

（注12） 小説家協会と劇作家協会は大正一五年一月七日に合併して日本文芸家協会の前身の文芸家協会となった。また、同時に、原田謙次・浜田広介らによって結成された無名作家同盟の存在も注意すべきだろう。『無名』の意義は、無名作家の純真なる芸術的良心を以て芸術に奉仕するの謂」(「無名作家同盟の宣言書」大10・7・10)であると述べているが、一方では、小説家協会に参加資格のない作家たちの権利を守るといって、「実生活上の労働組合的の性質」(原田謙次

「無名作家同盟の宣言書」下 大10・7・22（をもったものであった。  
『校本宮沢賢治全集』第十三卷（昭49・12刊）の注には、「島田の名とともに本書簡に引き合いに出されている『小説の作り方』或は『創作への道』』というのは架空の書名であらう」とある。

（日本語日本文学科 助教授）